

山田 賢 著

『移住民の秩序——清代四川地域社会史研究』

荒 武 達 朗

多くの研究者が認めているように、一九八〇年代は明清史研究の上で大きな画期であった。その基盤には、一九七九年に京都大学東南アジア研究センターで開催された『江南デルタ・シンポジウム』に代表されるように<sup>①</sup>、七〇年代後半における地理学・農学・文化人類学・人口学等という様々な分野と東洋史学との交流の深化があった。その新しい潮流の下で八一年に名古屋大学で開催されたシンポジウム『地域社会の視点——地域社会とリーダー——』は、八〇年代以降の研究動向の契機の一つとして位置づけられている。戦後日本の中国史研究は、一九七〇年代まで多くが生産関係に基づく階級構成の分析に集中していた。この状況をふまえて森正夫氏は、「階級的矛盾・差異を孕みながらも」「共通の社会秩序の下に置かれている」場を「地域社会」と定義し、この「場」

とそこに存立している「秩序」を分析視角とする方法論を提唱された。この社会秩序とは「この場を構成する人々の意識の統合にとって不可欠な媒体、いわばニガリともいべき存在として位置づけられる」<sup>②</sup>。それ以降毎年の『回顧と展望』をひもとけば、この時期の明清史研究の特徴の一つとして、地域社会を対象とした個別研究の深化が見て取れる。岸本美緒氏のまとめによれば、森氏の提言以後地域社会論は「秩序論」として展開していく。そこからは「実態的枠組」は取り合えず捨象され、地域社会とは必ずしも明確な団体と重なり合わない「場」、即ち人々の意識のなかで共有される一つの認知的世界として提示されている<sup>③</sup>。「場」を構成させる秩序原理は何か、という問題関心から特に地域内の社会関係・社会団体の形成に注目した研究が多く登場した。その結果地域

社会内の、階級構成に関わらない多様な像や結合形態が明らかになりつつある。それは「階級分析」というアプローチからは決して窺うことが出来なかったものである。もとより「地域社会論」に対しては、既上記八一年のシンポジウムにおいて既に指摘されているように様々な批判もある。評者の見解に関しては行論の中で言及する。

ところで、中国史研究において移住現象の研究は一つの領域を形成している。漢民族の歴史はその居住域拡大の歴史でもある。巨視的に見れば人口稠密な先進地域から希薄なフロントニアへ、微視的に見れば農耕に容易な地形から困難な地形へと、漢民族は拡散していった。特に一八世紀後半以降はそれまででない規模で移住現象が展開する。唐宋変革期とならんで研究関心の集中する時代である。この人の移動に関する研究——「移住史研究」という分野——が、一九八〇年代以降に「地域社会論」の影響を大きく受けた事は否定できない。その傾向は開発の進展にともなう地理的景観の変化、宗族など諸社会集団の形成、州県行政との関連など様々な論点の出現に特徴付けられる。即ちこれは移住現象のみをその他の領域から切り離して検討するのに止まるものではない。それが地域社会の容貌や変遷にとって、またそこに生きる人々

の秩序・規範意識にとって、如何なる意味をもっているのか、という問題関心が中心的地位を占めるようになったのである。本書の著者山田賢氏もまた八〇年代以降の傾向をリードする論客の一人である。氏は八六年に「清代の移住民社会——嘉慶白蓮教反乱の基礎的考察」(『史林』六九一六)を世に出されて以来、一貫して四川地方の雲陽県を主な考察の場とし、流入する移住民に視点を据えて「一つの地域社会の形成・展開」を研究されている。氏の一連の業績が集約されたものが本書であり、移住・開発・社会团体・地方行政等の各方面の研究にとっても、多くの有意義な論点を提示している。本書は八〇年代以降九〇年代前半の移住史研究の一つの到達点であることは勿論、「地域社会論」に対する重要な提言をも含んでいる。

本書に関しては既に井上徹氏を始めとしていくつかの批評・紹介が<sup>③</sup>出されている。また本書が上梓されてから満二年が経過している。従って本稿では特に項を設けて内容紹介を行わず、構成の概略・課題の確認・特徴の指摘を以てそれに代え、その上で本書のはらむ問題点について言及したい。

本書は以下のとおり三部七章構成である。

はしがき

関連地図

序章

中国内地移住史の課題

——考察の端緒——

第I部 移住民と地域統合

第一章

四川省雲陽県

——嘉慶白蓮教反乱前夜の移住民社会——

第二章

移住民社会と地域エリート

——雲陽涂氏の軌跡——

附編

伝統中国における同族結合・同郷結合に関する覚書

——四川省雲陽県訪問記——

第II部 移住民と地域変動

第三章

雲陽県移住民社会における嘉慶白蓮教反乱

第四章

嘉慶白蓮教反乱の思想

——白蓮教宗教儀礼解析試論——

第III部 移住民社会の終焉

第五章

「紳糧」と「公局」

——清代の地域エリート——

第六章

四川省合州

——公局と紳糧体制の成立——

第七章

清末四川の紅灯教反乱

——移住民社会の終焉——

結語

あとがき

索引

「序章」で述べられる課題は三つであり、各々がそれぞれに対応している。移住民の定住への意思に支えられた秩序形成への求心力は一つの安定したかたち——「地域統合」——に凝集していく。それを雲陽県という具体的な場において、移住民の結合形態の変遷をたどる形で検証することが、第一の課題である。急激に進展する移住民の流入と強まる地域統合の圧力は地域内部に地域エリートと非エリートの二者を析出し、両者間の矛盾が顕在化していく。そこから生じた反統合への運動——「地域変動」——の様態と意識を嘉慶白蓮教反乱という事件に即して解明する。以上が第二の課題である。「地域統合」と「地域変動」という二つの局面を経た後に地域社会に新たな相貌が現れる。それを地域エリートの行政参与（公局体制の成立）と反地域エリートの運動（紅灯教反乱）の分析を通じて描写する事が第三の課題である。これら三つの課題の検討によって、明末清初にはば完全な空白地となっていた地域の中に、新たな安定的秩序が清代を通じて生み出されてくる展開過程が跡付けられる。

では早速本書の特徴をまとめたい。まず第一に地域社会の具体的な範囲が設定されている事を挙げたい。本書を「地域社会論」に位置づける上で、この範囲の画定は重要な要件で

あろう。冒頭で概略を記した地域社会論の歩みの中で、地域社会の実態的枠組はむしろ棚上げにされている。人々の規範となる秩序の様態は明らかになりつつあるが、今一度、その「人間の生きる基本的な場」が果して具体的な姿・範囲を持ちえないのか、という問題も合わせて考察する必要がある。

八〇年代以降「地域社会」という言葉は多用されているが、研究視角によって想定される範囲が様々であるようにも思われる。地域社会論に対する評者の批判の一つは、地域社会の境界が不明瞭である、という点にある。場を成り立たせている「秩序意識」の解明という問題意識から見れば空間的範囲の探究は二義的なものでしかないだろう。だが何らかの「場」である以上、秩序が共有される範囲は当然あってもよいのではなからうか。勿論、地域社会に具体的な範囲があるとしても、時代や地域、構成員をとりまく社会状況によって可変的である事も十分に考えられる。しかしながら、秩序成立に関して、もしも全中国的にそれぞれの地域で互いに似通った規模の範囲が存在するならば、これは王朝国家と個々の地域社会との相互関係に繋がる問題であり興味深い。

さて山田氏の場合、直接言及されてはいないが、指定する範囲が県であることは明らかである。移住民流入の甚だしい

乾隆年間の高い不安定性と流動性、それが故に生じる統合・反統合の圧力。それを最終的に一つの規範的秩序を共有する安定的システムに導いたものこそ、県を範囲として張りめぐらされた公局体制であった。この設定は稲田清一氏<sup>5</sup>や上田信氏<sup>6</sup>の研究成果とも符合する。稲田氏は日記史料の分析を通じて、江南の一郷居地主の日常的接触の範囲が県境を越えることが稀であるとされる。経済活動・交友・通婚・情報収集・官との接触はいずれも日常生活の重要な構成要素であり、それぞれ独自の空間的領域を有する。それらを重ね合わせた時、浮かび上がってくるものは県という領域なのである。上田氏は明清時代の浙東地域エリートの宗族組織の地域的拡散に注目される。清代中期には、「地域」の問題を県レベルで解決する必要が生まれ、その範囲を基盤とする集団的エリートが出現するという。これは四川の清末と時期的にずれぬものの、公局体制と基本的に同じ性格のものと考えられないだろうか。三氏の成果を統一的に見れば、同時代人にとって県が秩序の基体として一般的に認識されうる範囲であると考えられる。それは行政が上から地域をはめ込むかたちで範囲を指定するものではなく、構成員の日常的活動や社会関係の重層によって眼前に現れるものである。構成員を包み込む秩序を維持し、

また地域の問題を解決するものが県という具体的な範囲であると言えないだろうか。それは周辺地域・先進地域共に共通する事象であり、それ故に県レベルで地域社会の具体的な容貌を論ずる試みは意味のあることであろう。

第二の特徴は、上述の文脈における地域社会の生成モデルが清代を貫通して提示されていることである。流動性・不安定性の端的な表現形態として、清代社会の基調をなした巨大な人口移動が挙げられ、本書の分析視角の基底をなしている。移住民は不安定性への対抗として同郷結合や同族結合といった無数の私的関係を取り結ぶ。それらは互いに接触・融合することを通じて「統合」へと向かい、地域社会全体を覆う社会関係の網の目として広げられていく。統合の過程から矛盾が噴出し、地域は「変動」に包まれる。この「地域統合」「地域変動」という二つの局面を経た後に、県を範囲とした公局体制が成立し、社会は一つの規範的秩序を共有する安定的システムに固定される。この段階が、流動性と不安定性を表象とする移住民社会の「終焉」という局面である。本書はこのように明末清初のほぼ完全な空白から一つの地域社会が生成される過程を論ずる、動態的視点に基づいた研究である。

第三に、第一と第二の論点とも関連するところであるが、

このように生成されてきた地域社会と国家との関連が論じられている。以前から「地域社会論」に対する批判の一つとして国家論の欠如があった。山本進氏は「国家の支配或いは国家それ自体を地域社会に外在する与件と捉えているように思われる」と述べられる。更に山本氏は国家と地域の相互補完関係という山田氏の認識に対しても厳しい批判を投げかけておられるが、それは両氏ともに地域を論ずるに当たって、国家を射程内にいれねばならないという問題意識を共有されているが故とも思われる。王朝国家と地域の相互関係に関する山田氏の見解は第Ⅲ部に特に顕著に現れている。氏は公局体制の叙述において、王朝国家の地域に対する一円的な支配という理解と、重田徳氏の「郷紳支配論」——紳士の地方行政参与は地主層による行政権の浸食であるとの理解——の両方を批判される。本書の議論では地主層（＝糧戸）は上部から紳士的要素、威信を分与され、「紳糧」層として固定される。その代わりに彼らは地方行政の遂行に不可欠の部分を形成し、地域社会は一つの統合体として完結する（二二二頁）。それは中央からの地域の自立を志向するものではなく、紳糧層による「善挙」の同心円を重ねながら、王朝国家によって実現される普遍的な「公」秩序自体に連なっていくとする

志向性によって裏付けられる(二九七頁)。この事態は一面では地域の自立・独立ともとれるが、反面国家による一円の支配の様相をも呈している。この相対立する理解は矛盾せず、国家と地域は相互補完的な均衡の上に立った体制なのである(二〇〇頁)。山田氏の理解によれば王朝国家と地域社会の關係は互いに対立するものではなく、寧ろ相互補完的なものであるという。尤も山田氏自身も述べておられるように地域エリート層によって取り結ばれる公局体制は四川において殊に顕著な展開を見せた(二一一頁)。それは时期的地域的差異とも考えられるが、反面地域エリート層による「地方自治」組織が清代後期に他地域においても叢生し、その多くが行政機構の補完という側面をも有していた事も確認されつつある。⑨

それ故、王朝国家の統治形態を強力な一円の支配と強調したり、「地方自治」を地主層による行政権の浸食としたりする事は共に片手落ちであろう。そこで地域社会に生きる人々の「秩序意識」を重要な視角として、王朝国家と地域の相互關係を論ずる山田氏の分析は意義の有る事と思われる。それは王朝国家の統治の実態把握に大きな提言がなされているとも言える。

#### 第四に、移住民社会の展開モデル内での邪教反乱の位置付

けが挙げられる。本書では嘉慶白蓮教反乱と清末の紅灯教反乱の二つが取り上げられている。従来、嘉慶白蓮教反乱の研究はその構成員を非定住的性格を有し国家支配を受け入れぬものと想定し、反乱の性格に関しても定住者対移住民という対立の構図を設定してきた。本書はこうした見解に異議を唱え、その枠組を見直そうとする。反乱者とその弾圧者とは結局地域内で上昇戦略に失敗した血縁集団と成功したそれである、とする。後者は後に紳糧身分へと成長していく存在に他ならない。前者は経済的・社会的に圧迫され上昇の機会さえも奪われてしまう。この両者間に矛盾が生じ反乱への契機となる。ここまでの議論は経済的に優勢な者と劣勢な者との対抗関係から反乱現象を論ずる従来の研究成果を、山田氏の文脈に解釈しなおしたものとも言えよう。だが、本書の邪教研究史における意義は、地域社会の展開モデルのそれぞれの段階で、人々を巻き込んでいく邪教の教義に考察を進めている点にある。安定的秩序が地域に生成されていない段階、すなわち流動性の高い状況下では、経済的・社会的に劣位に置かれた人々は現存の秩序を解体しようとする白蓮教の教義に共鳴する。彼ら自身を守るはずの血縁集団さえも役に立たぬと考えられた時に、彼らは反乱集団へと再編成されていく。反

面、国家の存立基盤となる伝統的秩序が地域社会に実現された段階、即ち「移住民社会終焉」後には、反乱の目的は秩序の再生に求められる。紅灯教反乱の対象は、彼らの生活を脅かすキリスト教、並びに秩序護持を果たしえぬ墮落した官吏や公局であった。紅灯教は嘉慶白蓮教反乱の末裔と見られ共通点が多い。だが教義の詳細な検討の結果、それが現存の秩序の護持・再生を願うものとして現象していると結論される。本書のアプローチは反乱を体制対反体制という単純な構図に当てはめようとしているのではない。反乱という現象から「秩序形成」「反秩序」をカギとして地域社会を素描しているのである。これと地域社会の固定的秩序形成のモデルとを合わせて見た時、「移住民社会」の相貌の展開のみならず、ここに生きる人々の「自らを包み込む秩序に対する意識」の展開をもイメージ出来るのである。

以上四点にわたって本書の特徴を整理した。本書は地域社会の形成から成熟までを、そこに生きる人々の秩序意識の形成・伝統中国の基層への包摂をからめて、素描しているのである。

本書は全体的に明快な論理に貫かれており非常に読みやすい。また構築されるモデルが実に説得的である。しかしなが

ら、先に指摘してきたように、本書は多くの論争すべき話題を含んでいる。以下評者の関心から三つの問題点を提示したい。第一は移住当初の人々が選択する社会関係についてである。他地域の事例も絡めて評者の見解を述べる。第二は反乱者の実態についてである。秩序形成過程の中での反乱の意味付けを行う山田氏の手法は見事だが、そこから再び具体的な反乱者の姿に接近する必要がある。第三は本書の考察する移住民社会史の歴史たる「移住現象の発生」についてである。全体として「地域社会に生きる人々の相貌は如何なるものか」という観点を基調として問題点を提示したい。

第一の問題点は「地域統合の過程における諸社会関係」である。第一章で述べられる山田氏の理解においては、移住とは先ず同郷の絆によって定着する（同郷村落）。その中で有力化した血縁集団がそこから離脱し単独で聚居する（同姓村落）。更にかかる同族集団は自らを伝統的価値観に沿いつつ組織として固定せしめようとする（宗族組織の誕生）。山田氏の提示する同郷村落↓同族村落↓宗族という定住過程のモデルは、流動性・不安定性という共通の課題の下に置かれた移住民が秩序形成に向けてどのように社会関係を展開させていったかを説明するものである。中国人が移住するにあたっ

て、移住先の同郷や同族を頼るという事象は今世紀初頭に中国東北地方（所謂「満洲」）を訪れた日本人によっても既に明らかにされているが、本書はそれを清代中期の四川において再び確認したと言えるだろう。秩序形成の問題は取り合えず措くとして、評者は山田氏のモデルがどれほど普遍的なものであるかという素朴な疑問を持つ。人々の置かれていた状況の中からのどのような原理に基づいて社会関係が構築されるのか、という問題視角を持った場合には尚更その感が強い。『刑科題本』を用いた租佃関係の分析（二三四～三七頁）や瀬川昌久氏の研究成果<sup>①</sup>に基づいて、山田氏は移住当初の社会関係が同郷を基調としたものであるとする。第二章の涂氏定住最初期の様相がまさにそれを裏付けている。帰住地において孤独な数口程度の個別家族にとって唯一「拠所」とできるのは同郷同士の結合である。山田氏は「遇有郷貫、便寄住、写地開墾（三五頁）」という言葉のままに、互いに依附し合い、次々と同郷の新規参入者を受け入れて、同郷村落という形に結実するとされる。確かに同郷同士という関係は租佃契約に有利に働くであろう。しかしながら同郷同士の関係は当然の事ながら一つの村落全てを覆う関係ではありえず、村落内の数家族の間で締結される個別的な関係に過ぎない。同じく数

家族がまとまって（或いは前後して）移住したとしてもその関係もまた村落全体のものであるとは限らない。山田氏の提示する史料を見ても、同郷間で租佃関係が結ばれた形跡は窺えるものの同郷村落の形成を結論付けることは出来ないように思われる。（ただ三七頁の民国『大足県志』の資料は玉皇溝一帯に湖南永州府出身者が多いことを示しているが、それが同郷者による村落なのかは不鮮明である。）評者の疑問は、山田氏の想定する村落像と評者のそれが異なるが故に生じるものなのかもしれない。山田氏が村落の形態やその内部の結合関係の諸相などを捨象して、同郷を基調とする結合関係があれば、それをそのまま同郷「村落」という言葉で表現されるのならば納得できるのである。ここでは同じく巨大なフロンティアであった中国東北地方の事例から移住当初の社会関係に接近したい。

四川が嘉慶年間に飽和状態を迎えたのに対して、東北は清初から民国期まで開発の前線の北上によって移住民を不断に受け入れてきた地域である。二〇世紀前半の「北満」は前世紀中葉に開発が始まり流動性が極めて高い。その点では移住民社会としての四川と共通点がある。北満の一七カ村（原資料では一七屯と表現されている）を対象とした満鉄の調査結



果によれば、村民の内半分近くが居住年数五年以下であり、五カ年の動態調査でも村内の土地所有者の三割、非土地所有者の五割がその間に転出入している<sup>12</sup>。この転出入の激しさは本書で言うところの、移住民社会の流動性の高さの一面面であろう。その中の于坦店屯の構成員の約五割が山東省膠東道を出身地とする。同郷村落と言えないこともないが、東北地方に流入した移住民自体膠東道の間が多いので、その傾向をそのまま反映したものとも考えられる。村人同士の結合は転出入の激しさにも表現されるように非常に希薄である。隣同士や住み込みでない限り同郷であっても付き合いはない。この村落はその形態を見れば必ずしも同郷村落ではないし、そこにある同郷の結合は弱い。新規参入する移住民の受け皿としての同郷の機能さえも見られない。

では移住当初の移住民はどのような結合によって生存と上昇を図ろうとするのだろうか。山田氏も参考とされている菊池秀明氏の広西における研究では、多くの選択肢を確保することと危機を回避しつつ上昇の可能性を模索しようとする移住民社会の人々の姿が確認されている<sup>13</sup>。菊池氏の議論を敷衍するならば、彼らは生存のために雑多な生業に従事するだけではなく、自らが繋ぎ得る同族、同郷、同業といったありと

あらゆる社会関係に触手を延ばしていくだろう。評者は同郷関係の役割を軽視するものではないが、それが不可欠なものであるとも考えない。時代を逆上り乾隆年間の「南満」に目を移す。この時代の南満は関内からの移住民を受け入れるフロンティアであった。山東半島の族譜を検討すれば、東北に人員を送出し東北で受け入れられる基体として両地域に跨がって成立する宗族の存在が確認される<sup>14</sup>。もし同郷よりも強固な結合——例えば同族——が移住民の身近にあり支援を受けやすければ、彼らはそちらを選択する。その場合移住当初の社会関係は同郷ではなく「同族」中心となる。また一方で、故郷が福建から東北へというように遠く離れており交通が不便な場合など故郷の同族関係が機能しない場合には、社会関係は同郷が中心となる<sup>15</sup>。各種の社会関係は様々な生業とともに移住民の身を護る「保険」のようなものである。その原理は文化人類学の方面からも指摘されているように、中国人に共有されるものである<sup>16</sup>。不安定な状況下に置かれた個別家族は生存の為に複雑な社会関係を最も有利なかたちで展開させていこうとする。

以上のような移住当初の様々な社会関係の中から特に血縁関係が純化され拠所の基盤となり「同族結合」が選択される。

流動と不安定の中で何らかの「拠所」が求められるのは理解できよう。だが、先進地域や周辺地域を問わず全中国的に共通して、何故同族結合や宗族が再生産されていくのだろうか。山田氏は移住民社会という条件下では、流動性と不安定性の高さに対抗するための「上昇手段」というかたちで血縁関係が重視されるという。又、本書に対する批評と紹介で井上徹氏はそれに付け加える形で、social mobilityに規定される階層間の流動性や科挙受験という要因を強調されている。両氏の宗族理解は宗族を取り巻く自然的社会的環境によって宗族結成を論じようとするものであろう。それは現状を維持し、可能ならば上昇しようとする志向性を持つ宗族の存在を説明する。しかしながら、こうした方法によって捨象されてしまった部分も決して小さくないように思われる。すなわち両氏は、実質的な「拠所」ではなく単なる理念的な集団、しかし明確な実態を持った宗族の存在を軽視されているようだ。例を挙げれば、細々とした祖先祭祀を執り行う程度の中小宗族がある。また他にも意識の上で輩行関係の厳然たる構造があっても、社会的経済的に何ら機能を有さない宗族が確認されている<sup>18)</sup>。このような宗族はどの地域にも存在するだろう。両氏とも重々承知されていることであるが、機能集団(社会的流動

性への対抗なり科挙受験なりの機能)としての宗族が全てであるとは言えない。機能面のみにとらわれることなく、中国人各々が持つ「族」への憧れ(郷村内に自らの属する族を作り上げたいという欲求)や社会全体から見た「族」の位置づけなど、観念面からのアプローチも必要とされているのではないだろうか。前述のような社会的経済的機能を有さない血縁集団・宗族組織の研究は、評者を含めて今後の宗族研究の大きな課題である。

第二の問題点として「反乱者の実態」を取り上げたい。繰り返すように山田氏は邪教を研究する上で、当該時代の人々の秩序意識を視角とする斬新な方法を導入された。その秩序形成の過程のなかに反乱を位置づけるモデルはスマートである。だが、秩序意識の問題から離れて、反乱者個人やその家族に視点を据えた時、再び不明瞭な一面が浮かび上がってくる。嘉慶白蓮教反乱の「現存秩序の解体」という運動から紅灯教反乱の「現存秩序の再生・護持」を願う運動へと変化する中で、反乱者はどのような原理に基づいて行動するのだろうか。先ずその教義がどれほど反乱参加者に浸透しており、彼ら自身自覚して行動していたのか、不明である。前出の菊池氏は太平天国発祥地の新興宗族に関して、「みな実は食に

より（太平軍に）従った」と、貧困者が生存と上昇の為太平軍に参加したという興味深い事例を紹介されている。彼らが太平天国の理想をどれほど理解していたかは明らかではない。が、反乱集団に対し集合離散を繰り返すその行動原理が機會主義によるものであることは明らかである。再度、東北地方の南部、熱河の朝陽金丹道教についての事例を紹介したい。金丹道教は白蓮教の一派であり、キリスト教会や官衙を攻撃した。その点では紅灯教反乱と共通するところが多い。ところがその参加者に注目すれば、実態は「飢民」であり生きるために続々と依附していく様が窺える。<sup>19)</sup>

同様の事が嘉慶白蓮教と紅灯教にも共通するのではないだろうか。教義の説く理想や儀礼がいかなるものであっても、反乱に参加する大多数の非エリート層は反乱の過程で生活の糧や上昇のチャンスを得ようとしているだけであると解釈できまいか、という疑問を評者は抱く。山田氏のように教義・儀礼から邪教の、社会的変遷のそれぞれの段階での意味に接近する方法は、今後の邪教研究に一つの展望を与える。しかし、だからこそ反乱当事者の相貌や彼ら個々人が抱く理想は、集団としての教義・儀礼の詳細な分析の下に埋没してしまつた感が強い。評者の言う所は邪教研究に何の展望も与えない

ものかもしれない。だが、反乱者個人と集団の両者を統合的に分析する方法は必要であろう。嘉慶白蓮教反乱の検討に關しては非エリートの析出過程と合わせて分析されており興味深い。紅灯教反乱に關しては物足りなさを感じる。その参加者は非エリートという蓋然的な括り方しかされていないので、それがいかなる人間たちによる運動なのかはいま一つイメージ出来ない。同時に嘉慶年間に至る矛盾の蓄積が純粹な経済的・政治的闘争ではなく、宗教反乱という形態で噴出したのは何故か、という山田氏の実に興味深い問題提起（一五四頁）は実証不足の感が強い。収奪される無数の非エリート、<sup>20)</sup>「宗教反乱の仮面を被った経済的・政治的闘争」であるとの性格が払拭できない。

第三に、本書に限らず中国内地移住史研究に対して論点を提示したい。個別家族にとつて「移住（移民、または循環運動の出稼）」はいかなる意味を持つのだろうか。古典的説明によれば、移住現象の発生は「人口に対する相対的土地不足」<sup>20)</sup>「零細土地経営者の大量析出」によつてもたらされる。本書においてもその理解は継承されている。乾隆年間の湖広では農業収入のみで生活できない農民が生み出されていた。彼らは生きるために客商となり四川との間を往復する内に定住の

機会を得る。土地の狭小化や喪失の為、土地獲得に強い渴望を抱いていたという(二九ノ三二頁)。同時代的觀察者の常套句からも窺えるように「土地不足と移住現象」の両者は密接な関係にあるように思われる。人口爆発と期を一にして移住現象の規模も頻度も高くなるのであるから、両者の間には相当高い相関性があるのだろう。だが、理解しやすが故に今に至るまで無批判に信じられてきた命題であるとも言える。今世紀前半に行われた数多くの農村調査によれば、農民の個別家族の生計は決して農業のみに依存するものではなく、副業や被傭労働で得られる収入も欠くべからざる一要素であった。農業では生活できないから他の生業(例えば行商)にも従事するというよりは、むしろ経営規模の大小如何に関わらず農業にも副業にも総合的に従事して生計を立てるとというのが実態に近い。そこで得られた中国「農民」像は農民という字面からその性格を規定することの危険性を我々に語りかける。そこで移住現象の発生を論ずる場合、農家の生計を詳しく考察する必要が生まれる。今世紀前半の山東から東北地方への移住現象では、一農家当りの土地の広狭は決定的要因とはなりえない。寧ろ故郷における雇傭と副業の機会の有無が重要な条件となる。極端な場合、少数の富戸による土地の兼

併が著しく進行しても、その所有地での雇傭労働の機会が存在する限り、多数の農民が故郷に留まり続ける村落もある。このように移住現象は人口に対する土地面積の比率に限らず様々な要因が絡みあって発生する。

また析出地にとつての移住の意味は何であろうか。滋賀秀三氏の『中国家族法の原理』の同居共財の理論によれば、<sup>21)</sup>中国の家族は一つの経済単位であり構成員が遠方で生業に就いても収入・支出は故郷の家族のそれと同じとされる。賀氏の議論は中国の家族が空間を超越した関係であることを明らかにしたものである。以上は言い換えれば故郷の家計を補完する為に構成員が出稼に行くという事、また出稼とは農業や副業、被傭労働などと同じく生計手段の一つでしかない事を意味している。更に移住の最初期で看過してはならないのは故郷の家族の役割である。森田明氏は福建晋江の施氏という宗族の分析を通じて、その台湾への移住において開発資金や故郷で培われた経営能力が大きな意味を持っていたと推定されている。<sup>22)</sup> また個別家族のレベルでも先に述べた同居共財の原理から定着までの必要経費・損失は基本的に故郷の家族の支出とされる。家族の紐帯は超空間的な性格を持っている為、例え故郷を離れ最終的に定住する事になっても、少な

くとも分家に至るまでの期間は故郷との連関を強く持たざるを得ない。移住とは基本的に故郷を捨てる乾坤一擲の大勝負ではない。結果的に故郷との関係が絶たれることになっても、初期には故郷に基盤を有しつつ、生計維持や上昇の為に構成員の一部を移住先の社会に送出する経済的な行為なのである。山田氏は本書「あとがき」において、日本史の速水融氏の研究成果<sup>23</sup>を用いて次のように述べられる。「江戸時代の日本では移動が生活の中に組み込まれていた」が、「それは同時代の中国における「移住」——家族も祖先祭祀も伴いつつ生活基盤を根こそぎ数百キロ単位で移転させるような状態——に比べれば、発生頻度においても、そして移動の空間的規模においても殆ど芥子粒のように小さいと評して過言ではないだろう。」と。私見によれば、速水氏の論ずる生活の為の移動（出稼或いは労働力移動）は同時代の中国においてもかなり頻繁に見られるものである。この一文を読むかぎりでは、山田氏は恒久的な「移民」こそが中国の人口移動の特色と理解されているようにも思われる。出稼による移動が移民に転化することは十分あり得ることであるが、両者は厳密には分けて考えねばならないだろう。労働力移動が多く見られる地域であっても、移民が生み出されにくい場合も存在する

のである。これらの点に関しては、機会を得て私見を公表したい。現在、中国内地移住史研究において以上のような問題はほぼ等閑に附されている。今後の課題として総合的な移住システムの説明が挙げられる<sup>24</sup>。

以上、個人と個別家族の視点から問題点を三つ指摘した。山田氏にとって自明の事であるので、本書の記述において意図的に省略された点もあるかもしれない。もしそうならば、評者の力量不足と読み込みの甘さと合わせて、ひたすら山田氏の御寛恕を請う次第である。全体として様々な論点を含んでおり今後の地域社会研究の新たな地平を開いた非常に刺激的な書物である。先にも述べたが王朝国家と地域の相互関係また「秩序」を実現・護持しようとする地域社会構成員の志向性等の問題が本書の提示した重要な論点である事を改めて確認しておきたい。今後、中国史研究の更なる展開において本書が一つの起爆剤となることを期待しつつ、筆を置くことにする。

## 註

(1) 渡辺忠世・桜井由躬雄編『中国江南の稲作文化』（日本放送出版協会、一九八四）「まえがき」参照。

- (2) 名古屋大学文学部東洋史学研究室編『地域社会の視点——地域社会とリーダー』一九八二の森正夫氏の基調報告。
- (3) 岸本美緒「明清期の社会組織と社会変容」(社会経済史学会編『社会経済史学の展望と課題』有斐閣、一九九二所収)。また同「モラルエコノミー論と中国社会研究」(『思想』七九二、一九九〇)も合わせて参照されたい。
- (4) 『東洋史研究』五四—三、一九九五。また上田信氏(『歴史学研究』六八〇、一九九六)と菊池秀明氏(『社会経済史学』六一六、一九九六)による書評もある。
- (5) 「清末江南における一郷居地主の生活空間——その範囲と構造についての試論」(『史学雑誌』九九—二、一九九〇)。
- (6) 「明清期・浙東における州県行政と地域エリート」(『東洋史研究』四六—三、一九八七)。
- (7) 「回顧と展望——明・清」(『史学雑誌』一〇二—五、一九九三)。
- (8) 「郷紳支配の成立と構造」(『岩波講座世界歴史』一二、岩波書店、一九七二)。
- (9) 清代後期の「地方自治」組織出現の萌芽に関しては以下の研究を参照されたい。江南を対象としたものでは夫馬進「善会、善堂の出發」(小野和子編『明清時代の政治と社会』京大人文研、一九八三所収)、天津の団練に関しては吉沢誠一郎「天津団練考」(『東洋学報』七八—一、一九九六)がある。因みに山本進「清代後期江浙の財政改革と善堂」(『史学雑誌』一〇四—一二、一九九五)は夫馬氏の論考を批判的に継承し、清代後期

- の財政改革と絡めた善堂設置という展望をしめされている。
- (10) 守田利遠編『滿洲地誌』(丸善、一九〇六)第八編「滿蒙西伯利亞と山東人」、及び同『滿洲地誌附図』(丸善、一九〇六)第十二表「滿蒙西伯利亞ニ於ケル山東移民配布図」は、今世紀初頭の東北地方とシベリア各地における山東人を出身地別に分類している。それによれば地域によって出身地の偏差がみられる。これは同郷の成功者に依附するかたちで移住が行われる為であるという。
- (11) 「村のかたち——華南村落の特質」(『民族学研究』四七一—、一九八二)。
- (12) 満鉄調査部「北滿に於ける雇農の研究」(博文堂、一九四二)。
- (13) 「清代広西の新興宗族と彼らを巡る社会関係」(『社会経済史学』五九—六、一九九四)。
- (14) 評者の参照した族譜は、道光二十一年修『丁氏族譜』(集居地・黄県)、民国四年修『黄県趙氏西支族譜』(集居地・黄県)など山東半島の宗族のものである。これらの宗族は山東・東北両地域に跨がって分支を展開しており、頻繁な行き来が確認される。東北分支は山東分支からの新規参入者の受け皿となっている。
- (15) 「奉天・錦州一带沿海地方、竟有閩人在彼搭寮居住、漸成村落」(『高宗純皇帝実録』(乾隆)五十六年四月辛亥)とあるように、福建人による同郷村落の形成が確認される。大多数の山東人の村落の大海の中で、点在する少数の福建村は移住民社会の中で正に自らを護る「拠所」の意味を持っていただろう。
- (16) この点に関しては、王松興「漢人の家族と社会」(伊藤亜人・

関本照夫・船曳建夫編『現代の社会人類学』第一巻、東大出版会、一九八七）の表現が興味深い。同類に基づいて広げた関係のネットワークを中国語で「関係網」といい、それを多く持つことは大工の道具箱に各種の道具がそろっているのと同じで、便利この上ないことであり、それが中国社会で生存し勝ち抜き秘訣なのである、という。

(17) 井上徹氏の一連の宗族研究、特に「宋代以降における宗族の特質の再検討——仁井田陞の同族「共同体」論をめぐって」(『名古屋大学東洋史研究報告』一二、一九八七)、「宗族の形成とその構造——明清時代の珠江デルタを対象として」(『史林』七二―五、一九八九)、「宗族形成の再開——明代中期以降の蘇州地方を対象として」(『名古屋大学東洋史研究報告』一八、一九九四)を参照されたい。尤も井上氏は機能を全く有さない中小宗族の存在を考慮していないわけではない。一九九四年の業績で、宗族形成が農民たち庶民層にまで下降する事態が商業的發展を遂げる地域で士大夫の宗族結成に牽引される事によって、また特に清末では国家体制の揺らぎによってもたらされたとされる。山田氏の宗族のイメージは本書「序章」に端的に現れている。宗族の普遍的理想と実態は別次元のものであるとし、「宗族が結集される動機はそれぞれの地域の固有の課題とも関わって複合的・多元的であり、それにもなって当然表現される宗族の形態・サイズも可変的であれば、選択される上昇戦略の様態も異なる」と述べられる。山田氏は地域的差異は認めながらも宗族が上昇戦略の一貫であると考えているように思われる。

(18) この種の宗族の実態は族譜史料には当然現れ難い。だが現代におけるフィールドワークは様々な形態の宗族の存在を我々に教えてくれる。瀬川昌久『中国人の村落と宗族』(弘文堂、一九九二)第四章、銭杭・謝維揚『伝統与転型——江南泰和農村宗族形態』(上海社会科学院出版社、一九九五)等参照。族譜史料より宗族の実態に接近しようとする試みには瀬川昌久『族譜——華南漢族の宗族・風水・移住』(風響社、一九九六)という優れた研究がある。

(19) 『朝陽金丹道教起義資料』(『清代檔案資料叢編』第十二輯、中華書局、一九八七所収)、一三七頁に光緒十七年十月十六日、「奴才曾經札飭各屬、遇有飢民加意撫恤、惟時將屆冬令、飢寒交迫、並突有外来教匪煽惑、馬賊勾結、以致聚集甚多、胆敢肆行搶掠、凶暴已極、誠恐裏脅日衆、滋蔓難圖」とある。

(20) 鈴木中正『清朝中期史研究』(燎原、一九五二)また Ping-ti Ho "Studies on the Population of China, 1368-1953", Harvard U.P., 1959, Chapter 7.

(21) 創文社、一九六七、六八―一〇八頁。

(22) 『明末清初における福建晋江の施氏』(『社会経済史学』五二―三、一九八六)。

(23) 『江戸の農民生活史』(NHKブックス、一九八八)。

(24) 『シンポジウム華南』(慶応義塾大学地域研究センター、一九九二)。既に華僑研究においては幾つかの業績が挙げられているが、内地移住に関しては移住(恒久的な移民にせよ、循環が原則の出稼にせよ)システムの解明は始と着手されていないように思われる。

一九九五年一月 名古屋大学出版会

A五版 ㊄十三〇五頁＋索引三頁 六〇〇〇円（税抜）

（あらたけ たつろう 名古屋大学大学院博士後期課程）